

関連イベント

* 申込方法やイベントの最新情報は、当館ホームページをご覧ください。▶



🐾 アーティスト・トーク「自作を語る」……………

3名の出品作家に、自作について語っていただきます。

10月 4日(土) ささめやゆきさん

10月 26日(日) どいかやさん

11月 8日(土) ミロコマチコさん

各回 | 14:00-15:30 *13:30開場

会場 | 美術館2階 研修室 定員 | 70名程度

*参加無料(要展覧会チケット)、
要事前申込(詳細は当館ホームページでお知らせします)



『ねこのチャッピー』
小峰書店、2011年



『ハーニャの庭で』
偕成社、2007年



『てつぞうはね』
ブロンズ新社、2013年

🐾 文化の日はナイト☆ミュージアム

猫グッズマルシェやキッチンカーも登場します。

秋の夜長を美術館でゆっくりお過ごしください。

日時 | 11月3日(月・祝)

20:00まで開館時間延長(入館は19:30まで)

「ねこ絵本の朗読会」

日時 | 11月3日(月・祝) 10:30-/11:30-/13:30-/各回20分程度

協力 | 愛知学泉短期大学幼児教育学科 入口愛ゼミ生の皆さん

*参加無料(要展覧会チケット)、申込不要

🐾 「わが家の猫自慢」猫の写真展示

ご自身で撮影した自慢の飼い猫の写真をご持参ください。
館内にある応募用紙に必要事項をご記入の上、写真を貼り付けて、
専用BOXに入れてください。本展会期中に館内で展示します。

募集内容 | お一人様1枚限り(1枚に複数猫可)

写真のサイズ=はがきサイズ(10.0×14.8cm)以下

記入事項 | 猫のお名前、性別、年齢(推定OK)、写真の紹介文



*応募した写真は返却しませんので、ご了承ください。

*写真は当館や第三者が撮影し、SNS、その他で発信される場合があります。

*写真は会期中、貼り替える場合があります。

🐾 学芸員によるギャラリー・トーク

日時 | 9月17日、10月1日・15日・29日(隔週水曜日)

14:00-15:00 *参加無料(要展覧会チケット)、申込不要

🐾 ねこ割引 対象 | ・猫グッズ持参の方 ・猫の絵柄の入った衣類を着用の方

*スマホ、タブレットなどの画面、本展チラシ類は対象外

割引 | 入場料から100円引き

一般 1,100円→1,000円 学生 800円→700円

*中学生以下の方が持参・着用の場合は、同伴者(一般、学生)1名が割引対象となります。

相互割引のご案内 「かたわらには、いつもネコ展」入場券(半券も可)の提示で、割引が受けられます。
(入場券1枚につき、各館1回1名限り。各種割引との併用不可)

1. 高浜市やきものの里かわら美術館・図書館 Tel.0566-52-3366
「トキントキンの時代」 会期:7/26(土)―10/19(日) …………… 当日券2割引
2. 清須市はるひ美術館 Tel.052-401-3881
「隙あらば猫 町田尚子絵本原画展」 会期:7/18(金)―9/28(日) …………… 観覧料100円引
3. 刈谷市歴史博物館 Tel.0566-63-6100
「海の縄文 山の縄文 -自然と共生した豊かなくらし-」 会期:10/4(土)―11/16(日) …… 観覧料100円引

刈谷市美術館

KARIYA CITY ART MUSEUM

〒448-0852 愛知県刈谷市住吉町4-5

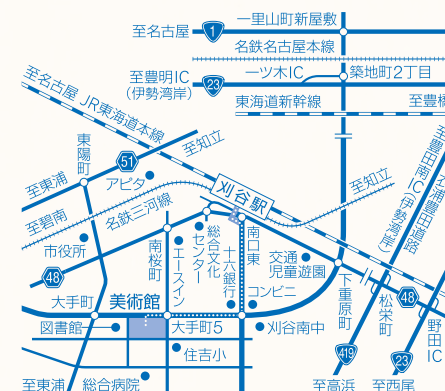
TEL: 0566-23-1636 FAX: 0566-26-0511

<https://www.city.kariya.lg.jp/museum/>

交通案内

〔電車〕 JR・名鉄三河線「刈谷駅」下車、南口から徒歩約10分 *「刈谷駅」はJR「名古屋駅」から快速で約20分

〔車〕 名古屋方面より=国道23号線(知立バイパス)「一ツ木IC」から約5km *駐車場あり(無料80台)



2025年9月13日|土|ー11月9日|日|

休 館 日 | 月曜日(ただし9月15日、10月13日、11月3日は開館)、9月16日(火)、10月14日(火)、11月4日(火)

開館時間 | 9:00-17:00(入館は16:30まで) *11月3日は20:00まで開館

入 場 料 | 一般1,100円 学生800円 中学生以下無料

*身体障害者、精神障害者保健福祉、療育の各手帳所持者及び付き添いの方(1名)は入場無料。入館の際に手帳をご提示ください(ミライROID可)。

刈谷市美術館

KARIYA CITY ART MUSEUM

主 催 | 刈谷市美術館、NHKエンタープライズ中部

協 力 | あかね書房、アリス館、イースト・プレス、岩崎書店、WAVE出版、偕成社、好学社、講談社、こぐま社、小峰書店、
青幻舎、童心社、福音館書店、葦山房、婦人之友社、復刊ドットコム、フレール館、ブロンズ新社、理論社

後 援 | 日本国際児童図書評議会(JBBY)、愛知県教育委員会

猫 はわたしたちにとって、とても身近な動物で、古くから一
緒に暮らしてきました。その愛らしい表情や動きだけではなく、気まぐれで自由、どこか高貴でミステリアスな雰囲気も猫なら
ではの魅力といえるでしょう。多くの人の心をとらえ続けている
猫は、犬とならぶペットの代表格であり、子ども向けの雑誌や絵
本などで早くから取りあげられてきました。その姿は個性的な主
人公として、またある時は味のあるわき役として、さまざまな画家
によって数多くの作品に描きだされてきました。

本展は、明治以降、子ども向けの雑誌や絵本などに登場して
きた「猫」のイラストレーションに着目し、日本の絵本100年のあ
ゆみをダイジェストにたどりつつ、今もあらたな創作が生みださ
れている「猫」絵本の多様な表現世界を紹介するものです。

第1部として、芸術的で教育的な絵雑誌の先駆けとなった明

第1部 1880年代から1940年代までの絵雑誌に見る、猫表現のうつり変わり

【出品作家(原画)】 北澤楽天、竹久夢二、岡本帰一、村山知義、深澤省三（順不同）

1860年代から80年代には、江戸時代の絵草紙の流れをく
んだ「赤本」や、欧文の「ちりめん本」が出版されていまし
た。やがて、1904年に日本初の幼児向け絵雑誌『お伽絵解こど
も』（児童美育会）が創刊され、1906年には巖谷小波監修の『幼
年画報』（博文館）が創刊されるなど、魅力的な表紙や口絵を取り
入れた「絵雑誌」という新たなジャンルが誕生し、刊行が始まり
ます。そうした絵雑誌には、シャルル・ペローの童話「長靴をはい
た猫」の翻訳も紹介されました。

大正期には、子どもの個性や自我を尊重する児童中心主義の
機運の高揚を背景として、『子供之友』（1914年創刊、婦人之友
社）や『コドモノクニ』（1922年創刊、東京社）など、芸術性を追

治末創刊の『幼年画報』（博文館）をはじめ、モダニズムの文化
が花開いた大正期に創刊された『子供之友』（婦人之友社）など
に描かれた「猫」表現を中心に取りあげます。芸術性の高い大正
期の絵雑誌で活躍した北澤楽天や村山知義、岡本帰一らが描
いた原画も展示します。

そして、第2部では、せなけいこや田島征三をはじめとした
1960年代から絵本を手がけてきた画家から、ささめやゆき、
ミロコマチコ、きくちちき、どいかやなど、幅広い世代の画家たち
が描いた絵本原画を紹介します。あわせて、制作過程が垣間見
られる下絵やダミー本なども展示し、それぞれの画家の創作にも
迫ります。画家たちが描いてきたさまざまな猫たち。愛でずには
いられない、その魅力を探ります。

求する絵雑誌が次々と発行され、絵雑誌の黄金時代を迎えます。
こうした絵雑誌には、西洋絵画や日本画を学んだ画家たちが競
い合うように登場し、やがて子どものための芸術としての「童画」
が誕生します。戦争の時代に入ると、絵雑誌は衰退していきま
すが、童画家たちの表現世界は戦後の画家たちにも受け継がれて
いきました。

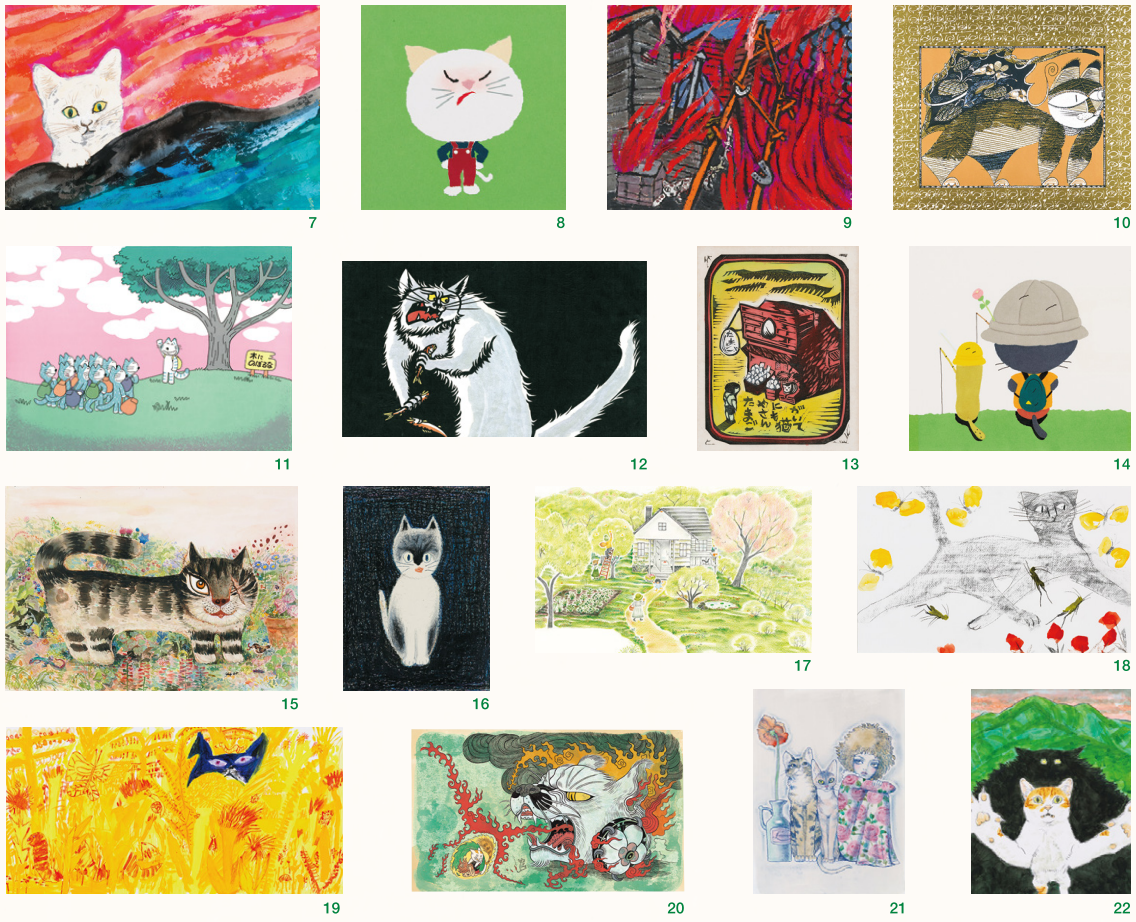
第1部では、ちりめん本『竹筧太郎（SCHIPPETARO）』をはじめ、『お伽絵解こど
も』『幼年画報』などの絵雑誌に加え、日本の近代絵本史の幕開
けを飾った『日本一ノ画噺』の中から「ネコノセカイ」を紹介しま
す。また、『子供之友』に登場した北澤楽天や岡本帰一らの貴重
な原画も展示します。



1 ちりめん本『日本昔噺 竹筧太郎（SCHIPPETARO）』（長谷川武次郎、1888年）個人蔵 2 『幼年画報』（1906年4月号、博文館）個人蔵 3 北澤楽天『子供之友』（1916年7月号）表紙原画 婦人之友社蔵
4 北澤楽天『ねこの子行水』『子供之友』（1914年7月号）原画 婦人之友社蔵 5 岡本帰一『いたずらコネコと洋服をなくしたアヒル』『子供之友』（1926年2月号）原画 婦人之友社蔵
6 深澤省三『お猫さんの毛はやっと元の通りになります』『子供之友』（1934年3月号）原画 婦人之友社蔵

猫でたどる日本のイラストレーション

7 朝倉摂『スイッチャーねこ』原画 1971年 大佛次郎記念館蔵 ©Setsu Asakura 8 せなけいこ『ふうせんねこ』原画 1972年 ©Keiko Sena 9 田島征三『猫は生きている』原画 1973年
刈谷市美術館寄託 ©Seizo Tashima 10 瀬川康男『ふたり』リトグラフ 1981年 刈谷市美術館蔵 ©Yasuo Segawa 11 馬場のぼる『11びきのねこ ふくろのなか』リトグラフ 1982年
こぐま社蔵 ©Noboru Baba 12 滝平二郎『猫山』表紙原画 1983年 滝平二郎事務所蔵 ©JIRO TAKIDAIRA OFFICE Inc. 13 井上洋介『ふりむけばねこ』関連木版画 1984年
刈谷市美術館蔵 ©Yosuke Inoue 14 村上康成『ふうた さかなつり』原画 1985年 ©Yasunari Murakami 15 片山健『タンゲくん』表紙・裏表紙原画 1992年 小さな絵本美術館寄託
©Ken Katayama 16 ささめやゆき『ねこのチャッピー』表紙原画 2011年 ©Yuki Sasameya 17 どいかや『ハーニヤの庭で』原画 2007年 ©Kaya Doi 18 きくちちき『やまねこのおはなし』
表紙原画 2012年 ©Chiki Kikuchi 19 ミロコマチコ『オレときいろ』表紙原画 2014年 ©mirocomachiko 20 石黒亜矢子『ばけねこぞろぞろ』原画 2015年 ©A.Ishiguro
21 宇野亞喜良『2ひきのねこ』表紙原画 2017年 ©AQUIRAX 22 五十嵐大介『ねこまがたけ』表紙原画 2023年 ©Daisuke Igarashi



第2部 1950年代から現在にいたる、さまざまな画家たちの猫絵本の原画を紹介

【出品作家(原画)】 朝倉摂、五十嵐大介、石黒亜矢子、井上洋介、宇野亞喜良、片山健、きくちちき、
ささめやゆき、瀬川康男、せなけいこ、滝平二郎、田島征三、どいかや、
馬場のぼる、ミロコマチコ、村上康成、安泰（50音順）

戦 後まもない時期から、子どもたちの心を満たそう
と、絵本や雑誌が続々と刊行されました。1956年
創刊の「こどものとも」（福音館書店）は、1冊1話の「月刊
物語絵本」という画期的な企画でした。個性豊かな画家
が描き手となったこのシリーズから、村山知義『おなかの
かわ』や横内襄『ちいさなねこ』なども誕生しました。

日本の絵本の黄金期といわれる60年代から70年代に
は、せなけいこ『ふうせんねこ』や田島征三『猫は生きている』
などが出版されました。そして、70年代の絵本ブームを
経て、1980年代から90年代は、既成概念にとらわれない、
個性的な表現が追求されました。瀬川康男『ふたり』や
片山健『タンゲくん』もこの時期の代表的な猫絵本です。

21世紀を迎え、アメリカ同時多発テロ事件（2001年）

や東日本大震災（2011年）に直面し、時代や社会を映し
だすメディアである絵本には、平和や命、日常などのテーマ
が再認識されるようになりました。春夏秋冬が美しいどい
かや『ハーニヤの庭で』や愛猫を描いたささめやゆき『ねこ
のチャッピー』、命が躍動するミロコマチコ『オレときいろ』
も現代の猫絵本といえるでしょう。また、世界各地で起こ
る紛争や天災を背景に、「怖い」と向きあう新しい表現が
生まれています。怪異を取りあげた石黒亜矢子『ばけねこ
ぞろぞろ』や五十嵐大介『ねこまがたけ』は、猫絵本に新
たな息吹をあたえています。

第2部では、1950年代から現在にいたる世代を越え
たさまざまな画家たちが手がけた、猫絵本のイラストレー
ション約380点を紹介します。